

先進校に学ぶキャリア教育の実践

生徒も教員も学び合い進める 地域の課題解決、学校の活性化

— 岡山・県立 林野高校 —

再編整備が進んで周辺に高校が少なくなり、入学生徒の多様化が進む林野高校。
地域の課題解決を目指す総合学習、最新のICT機器と先進的な手法を取り入れた授業実践を柱に、
教員も学び合いながら“田舎にあってもおいしい教育実践”を目指している。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

総合的な学習の時間 地域との連携 課題解決型学習
パフォーマンス課題とルーブリック評価 協同学習 ICT活用 教員研修

「過疎化が進む地元を元気に」 生徒主体で祭りを企画・開催

岡山県立林野高校があるのは、かつて高瀬舟往来の要衝の地として栄えた地域。しかし、現在は住民の高齢化と空き店舗が目立つ、静かな町だ。そんな町に活気を取り戻そうと、昨春秋、同校が企画した「むかし倉敷ふれあい祭り」が開催された。会場となったのは、繁栄期の地名「倉敷」を思い起こさせる蔵屋敷の町並みの中。地域に伝わる獅子舞や民話の紙芝居の披露、特産品をもとに生徒が考案したつくねやコロッケの販売、地域住民との合同による創作生け花の展示などが行われ、幅広い年齢層の住民でにぎわった。

これは、地域課題に取り組み同校の総合的な学習の時間「MDP(マイドリームプロジェクト)」の活動の一部として催されたもの。2年前にあるグループが始めた小規模な「ふれあい祭り」が、昨年度は全校の取り組みに発展した。昨年度まで同校の校長を務めた遠藤昌樹先生は「市内唯一の高校として、地域で活躍できる、確かな学力と豊かな人間性を備えた人材を育成することが使命」と語るが、そんな同校もまた厳しい状況にある。この10年間で県立高校の再編整備が進み、周辺の高校数は半数未満に減少。同校は多様な志向や学力をもつ生徒の育成を一手に担うようになった。学区の拡大により学校間の競争が激化する中、単位制の導入や進路目的別少人数講座の編成などで対応してきた。



町の公共広場や商店街を利用し、多彩なイベントや展示、ワークショップなどが行われた「むかし倉敷ふれあい祭り」。同校の企画は地域の住民や商店主にも好評で、先方から協力や場所提供の申し出が少なくなかったという

さらにこの数年も、「田舎にあってもおいしい教育実践を目指している」という教頭の香山真一先生の言葉どおり、大きく動いている。特に力を入れているのが、総合学習「MDP」の充実、そして最新のICT機器と協同学習の手法の導入による授業改革だ。いずれも「コミュニケーション力の育成を重視して進められている」。

「社会で活躍するために必要な力として、文科省は生きる力、経産省は社会人基礎力、OECDはキーコンピテンシーとそれぞれ別の言葉を使っていますが、それらの根幹にあるものは『コミュニケーション力』ではないでしょうか。単に会話ができるだけでなく、自分の主張をしっかりと伝え、相手の話も聞いて調整していきける『コミュニケーション力』。それを教育活動のあら



School Data

単位制普通科／1908年創立
 ／生徒数333人(男子154人・女子179人)
 進路状況(2011年度実績) 大学61.4%・短大5.2%
 専門学校20.9%・就職9.2%・進路未定3.3%
 岡山県美作市三倉田58-1
 TEL 0868-72-0030
 URL http://www.hayasino.okayama-c.ed.jp/

Outline

岡山県北東部の中山間地域に位置。人口減少に伴う県立高校の再編整備が進む中、2004年度に大原高校、07年度に江見商業高校を吸収合併し、現在は市内で唯一の高校。単位制を活用した進路目的別6コース(国公立大学理系/国公立大学文系/私立大学理系/私立大学文系/専修学校/就職)を編成し、多様な生徒の希望に対応している。09～11年度、文部科学省「学力向上実践研究推進事業」指定校。

ゆるる場面で生徒が活用し、お互いに力を引き出し合えるようにしていこうと取り組んでいます(香山教頭)

「楽しかった」で終わらせない課題解決型の総合学習へ

具体的な取り組み内容について、まずは総合学習「MDP」からみていきたい。MDPは、生徒が主体となり将来の夢を育む取り組みとして、総合学習開始以前の1999年からLHRや学校裁量時間を利用して、全教員がかかわる形で始められたもの。スタート当初から、興味分野別に1～3年生が異年齢グループを組織し、校外に出掛け多様な体験活動が行われていた。生徒の反応はよく、10年以上の継続で指導体制は安定し、MDPを担当する教務主任の岸本美紀子先生も「この形を続けたい」と思っていたという。

それが2010年度、転機を迎える。「以前のMDPは、将来の方向別にあらかじめ用意されたルートに沿って体験していく、いわば『カーナビ型』。体験して『楽しかった』『よかった』で終わっていないかと問われても、否定できませんでした」と岸本美紀子先生。そこで体験活動重視の特長を生かしつつ、その体験が各自の中に内在化し、その後の意識や行動につながるものとして、カーナビ型から課題発見・解決型へと大きく舵をきったのだ。

他地域や世界の課題に積極的に取り組んでいく、その第一歩として身近な課題

図1 総合学習「MDP」の年間の流れ

ステップ	時期	活動内容	具体例
ステップ1	4～6月	課題(テーマ)発見への取り組み・社会認識力育成	地域の専門家等による講話、地域魅力発見フィールドワークなどを実施
		パフォーマンス課題の決定	グループごとに設定
ステップ2	6～7月	課題解決に向けた取り組み	NPO団体、市役所職員、地域住民など17人の講師による講座開設
ステップ3	夏期休業	考察・分析・活動準備	グループごとに調査、体験、作品制作など
		グループ内でチームごとに中間発表<パフォーマンス1>	相互評価しチーム活動の改善に生かす
ステップ4	9月	地域に向けた活動<パフォーマンス2>	「むかし倉敷ふれあい祭り」への参加など
ステップ5	10月	まとめ・発表準備	ポスター、プレゼン資料、発表原稿作成
ステップ6	11月	実践報告会<パフォーマンス3>	ステージ発表、ポスターセッション
ステップ7	12月	個人まとめ	個人で言語化することで活動意義を再認識
ステップ8	1～2月	1年間の振り返り、新たな課題の認識<パフォーマンス4>	グループでの総括→クラス内発表

から考えさせようと、「地域に学ぶ・地域を学ぶ」を全体テーマに設定。「いかに問題意識をもたせるかがカギ」(岸本美紀子先生)と、初回の全体ガイダンスでさまざまなデータや映像を使って活動の意味を伝えたいうえで、興味分野別にグループを編成する。その中でさらに10人程度の班にわかれ、班ごとに取り組むたいテーマを掲

図2 総合学習「MDP」のグループ

MDPグループ	実践報告会の発表テーマ例
1 外国の人や文化、社会に関心がある	日本と外国の食文化の違いを発見しよう!
2 コンピュータの世界について詳しく知りたい	「むかし倉敷ふれあい祭り」のビデオ
3 心と脳の不思議を解明したい	子どもの心理について/美作を元気にしよう!
4 福祉で社会の役に立ちたい	宮原獅子舞の演舞
5 ものや芸術を創造することに関心がある	音楽の力で地域を盛り上げる
6 文化や歴史の謎に迫りたい	伝えよう美作の昔話～地域の魅力の再発見～
7 人体の仕組みや健康について関心がある	子どもの体力向上/地域につながる医療
8 日本の社会の仕組みを考えたい	美作市役所での学び～協働とは～
9 よりよい教育について考えたい	ふるさとクイズ/三歩太郎の紙芝居
10 自然の不思議や環境問題に関心がある	農業の原点から新しいスタイルを考える

図3 ステップ1のルーブリック(評価指標)

平成23年度 MDP活動 ステップ1 のルーブリック(評価指標)

ステップ	ルーブリック(評価指標)	評価
1	1. 課題発見の意欲 2. 課題発見の能力 3. 課題発見の成果	5 4 3 2 1
2	1. 課題解決の意欲 2. 課題解決の能力 3. 課題解決の成果	5 4 3 2 1
3	1. 発表の意欲 2. 発表の能力 3. 発表の成果	5 4 3 2 1
4	1. 振り返りの意欲 2. 振り返りの能力 3. 振り返りの成果	5 4 3 2 1

※上記のルーブリックに基づいて、活動ごとに自己評価しよう。活動内容についても簡単に記入しよう。

(写真上) 同校卒業生である作家あさのあつこ氏を特別講師に招いた科目「国語総合」の授業。机上のチューリップを題材に文章表現を試みる／(右下) 授業では電子黒板機能付き短焦点プロジェクターを活用／(左下) 小グループになり課題について考える協同学習



上げて活動。各グループには教員が3〜4人入り支援する。

また、従来から実践報告会でグループ単位の発表を行っていたが、そのあとに「個人まとめ」の時間を加えた。各自が1年間の学びを振り返り新たな課題発見につなげるとともに、思考力・表現力の向上も強く意識させることがねらいだ。

1年間を8ステップに分けて身につけたい能力・態度を具体化

しかし、10年度は全教員の共通理解が不十分のまま走りだしたため、グループ間の足並みがそろわなかったという。その反省を踏まえ、11年度は指導側にも配慮した改善が行われている。ポイントの1つは教員研修の強化だ。前年度末から職員会議や職員研修を開き、MDPの目的や生

徒に身につけさせたい力について再確認することから始めた。

もう1つは、目標を明確に示し、それに向けた流れを体系化したことだ。1年間の「課題発見への取り組み、社会認識力育成」から「1年間の振り返り、新たな課題の確認」まで8つのステップに分割(図1)。各グループが独自のパフォーマンス課題(1)を設定し、ステップごとに目指すパフォーマンスをルーブリック(2)を用いて具体的に示した(図3)。ルーブリック評価表は生徒が自己評価を行うものだが、教員にもまた身につけさせたい能力態度がわかり、指導のレベルがそろいやすい。

そのような体制でのぞんだ11年度、今までにない展開も生じている。人体の仕組み・健康グループの中で地域の特産品を生かした料理に取り組みむ班では、「コンビニと連携してお弁当の開発、販売に向けて動き始めた。班を担当する森田安奈先生は、「ESD(3)の視点を取り入れながら地域に、残す活動をしたい」と話す。また、冒頭で紹介したように、「むかし倉敷ふれあい祭り」の拡大開催も成功した。

「習得した知識や机上で考えてきたことを実際に活用できるお祭りで、生徒の表情がいきいきしていたのが印象的です。その後の実践報告会の発表も、例年より力のこもったものが多かったように感じました(岸本美紀子先生)

今年度はMDP担当を教務課の中に位置づけ、教科と総合学習の連携強化を図っていくという。また、地域をテーマとする学

校設定教科を作り、選択制でMDPをさらに深められる体制も整える予定だ。

学習者の主体性や協同性を伸ばす授業

次に、授業における取り組みに注目したい。幅広い学力の生徒が混在する同校だが、習熟度別授業は最小限にとどめる方針だ。ハード面ではICT機器、ソフトウェアでは協同学習の手法を取り入れ、どのような生徒も主体的に取り組める授業を目指している。

「小さなグループでの学び合いなら、授業に興味をもってなかった生徒も参加しやすい

くなります。また、学力の高い生徒にとっては、学んだ知識を統合してほかの人にわかりやすく説明することで、より深い理解につながります(香山教頭)

10年度に着任した香山教頭は、前任校で実践していた経験から、生徒が主体となる授業形態の一例として、自ら授業で協同学習を実践してみせた。「生徒の表情がまったく違う」と驚いた教員が挑戦を始め、今ではほとんどの教員が、教科の特性に合わせた柔軟な形で協同的な学びを取り入れているという。

英語科の由本拓司先生は、授業時間内で二斉授業と協同学習を組み合わせて展開することで、「生徒の集中力を切らさな

図4 外部講師招聘による教員研修・校外研修(12年度)

月	招聘講師/校外研修訪問先 テーマ:[授業]=授業の充実と改善 [MDP]=MDPの推進 [他]=進路指導、学校力増進、人権教育推進など [校外]=校外研修、視察
4月	[授業] 岡山大学 佐藤暁教授
5月	[授業] 岡山大学 佐藤暁教授 [授業] 広島大学附属中・高校 小橋雅彦教諭(電子黒板の活用) [MDP] 鳥取大学 藤井正教授 [校外] 上越教育大学、新潟県立柏崎常盤高校、木浦小学校(学び合い)
6月	[授業] 中京大学 杉江修治教授 [授業] 和歌山大学 江利川春雄教授 [他] 模試関連業者/熊本県立鹿本高校 竹原英治元校長 [校外] 岩手県立不来方高校、福岡高校(SELHi)
7月	[授業] 福岡県春日市立春日南中学校 下野六太教諭(体育指導を通じた生徒の伸ばし方) [授業][MDP][他] 京都大学 西岡加名恵准教授(パフォーマンス評価、ルーブリック評価) [他] 奈良教育大学 粕谷貴志准教授(Q-U調査の活用)
8月	[校外] 京都大学「全国スクーリーダー育成研修」
10月	[授業] 広島大学附属中・高校 小橋雅彦教諭(評価) [他] 兵庫県立和田山高校 瀬藤慶一教諭(Q-U調査の活用) [校外] 京都府立朱雀高校、大阪府立枚方なぎさ高校(特別支援教育)
11月	[授業] 岡山大学 佐藤暁教授 [MDP] 鳥取大学 藤井正教授ほか4名の有識者 [校外] 広島大学附属中・高校(協同学習、ESD) [校外] 京都府立園部高校(評価規準づくり)
12月	[他] 模試関連業者 [校外] 新見市立高尾小学校(ICT活用授業)
1月	[授業] 岡山大学 佐藤暁教授 [校外] 岡山大学・ESD協働推進室主催 ESDリレーセミナー [校外] CoREF×埼玉県「県立高校学力向上基盤形成事業」平成23年度報告会
2月	[授業] 岡山大学 佐藤暁教授 [MDP] 岡山大学 川田力准教授、矢掛高校 室貴由輝教諭(ESD)
3月	[他] 模試関連業者 [授業] 広島大学附属中・高校 小橋雅彦教諭(CAN-DOリスト)

*1 パフォーマンス課題：知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような課題
*2 ルーブリック：成功の度合いを示す数段階の尺度(1~5、A・B・Cなど)と、それぞれの尺度に対応するパフォーマンスの特徴を記した評価基準表
*3 ESD：Education for Sustainable Development(持続可能な開発を促進するため、地球的な視野をもつ市民の育成を目的とする教育)



英語科

岸本奈緒子先生

英語科

由本拓司先生

MDP主任

森田安奈先生

教務主任

岸本美紀子先生

進路指導課長

瀬島美穂先生

教頭

香山真一先生

校長(取材時)

遠藤昌樹先生

「教員が楽しくなければ生徒も楽しくない」「教員は難問ほど元気が出る」「失敗を恐れず挑戦しよう」……と、どの教員の言葉からも、校内の前向きなムードが伝わってくる。MDPの改善や授業改革が順調なのは、そうした教員の意識の高さ、そしてスキルを高める教員の学び合いがあるからではないだろうか。

例えば、同校の授業はほかの教員に対して常にオープンだ。実践方法の改善に向け、教科の枠を超えて授業見学し合う姿が見られる。「効果的な方法をどんどん取り入れたい」という由本先生は、昨年度、授業協力も含めると30回を超す授業を見学した。「経験が浅いのもっと力をつけたい」という岸本奈緒子先生は、自分の授業を見てもらい先輩教員からアドバイスを受けることで授業改善を図っていると

先進的な実践や改善方法を求め 教員が自ら動き学び合う

いメリハリのある授業ができるようになった」との手応えを感じている。昨年度1学年のクラス担任を務めた岸本奈緒子先生は、「最初は戸惑いがあった様子でしたが、今はスムーズにグループで話し合いができ、授業以外のさまざまな場面でもじょうずに協力するようになりました」と話す。「授業を通じてお互いを認め合い、生徒が集団として学びに向かう雰囲気になってきています。その土台の上にさまざまな活動が花開くと期待しています」(香山教頭)

Interview



ふれあい祭り実行委員長

3年 春名紗良さん (写真左)

ふれあい祭り実行委員 3年 はやて 廣畑 颯さん (写真右)

自分たちの手で 地元を盛り上げていきたい

「私は管理栄養士の仕事に興味があり、MDPでは『人体のしくみ・健康』グループに所属しています。むかし倉敷ふれあい祭りでは、自分たちで美作市の特産品の黒豆を使ったつくねを開発し、地域の皆さんに食べていただきました。また、高校時代に『これをやった』と思える体験をしたくて、ふれあい祭りの実行委員長にも手をあげました。他の委員や先生方と企画を考えたり、地域の方と話し合ったりするのは大変でしたが、やりがいも大きかったです。ふれあい祭りのあいさつで地域を回り、若い人が本当に少ないな、と感じたので、将来は地元に残ってできる仕事を見つけないと思っています」(春名さん)

「今、荒れ果てた棚田の再生や古民家再生に取り組む『地域おこし協力隊』(*4)の活動に参加しています。きっかけは、6月のMDPのスペシャル講座『ダイア場』に講師として来られた協力隊隊員の話です。以前から漠然と地元の衰退を何とかしたいという気持ちがあったばかりは、東京出身で当時22歳の隊員の考え方に共感し、田植えや稲刈りなど協力隊の活動に参加するように。そこで協力隊の方と話すうちに、将来に対する思いも明確になってきました。もっと地元を盛り上げ、いったん都会に出てまた帰ってこられるような魅力的な地域をつくれたらと考えています」(廣畑さん)

*4 地域おこし協力隊：美作の地域おこしのために各地から、自ら志願して地域活性化にとりくむ団体

いう。さらに校外に対する授業公開にも積極的で、研究授業の予告をHPや書面で他校に発信。今年度は年間200人を超す来校者があった。

また、教員研修の機会の多さも目をひく(図4)。昨年度は外部講師を招いた校内研修会を年間20回開催。「第1線の講師から最先端の手法を学ぶ」(香山教頭)との観点で人選、計画されている。さらに、校外研修や他校視察にも昨年度は約10回22人の教員が出向いた。朝礼伝達のプリントの裏面で研修会等の情報が紹介され、興味をもった教員が参加を申し出るのだという。こうした機会にベテラン教員も含めて積極的に、進路指導課長の瀬島美穂先生はこう話す。

「研修が急増した当初は『またか』という雲雨気もありましたが、今では皆さん期待のほうが大いようです。それも研修が

実践や指導に役立ち、「受けて良かった」という実感があるから。このような機会に恵まれているのありがたいですね」

国立大学合格者が 3年間で約1.5倍に増加

この数年、MDP等の経験を生かして難関大学の推薦・AO入試に挑戦し、成果をあげる生徒が増えている。今春の国立大学合格者は30人(うちAO・推薦22人)で、3年間で約1.5倍に増えた。ただし、同校が目指すのは、AO・推薦だけに頼る学校ではない。

「行動力、発想力さえあればいいのではなく、それらの力を裏付ける十分な学力も重要です。MDP等で育まれる意欲や能動的な姿勢がベースにあるからこそ、教科学習にも積極的に取り組みますが、さら

に学びが将来にしっかりとつながる指導を研究していきたいと思えます」(瀬島先生)

今後の重点課題について遠藤前校長は「さらなる校外連携を進めること」という。すでにある地域の商工会やNPO、市教委などとの連携に加え、今年度は地域の幼稚園・保育園や小・中学校と連携して生徒の活躍の場を広げ、科学技術振興機構によるSPP(サイエンスパートナーシッププロジェクト)等を活用した大学との連携強化により課題解決型の学習を進化させていく方向だ。ほか、「ESDの視点を教科学習に取り入れていきたい」「他校と合同で活動する場を設けたい」など、各教員も個別に取り組みたい課題をもつ。

「前年どおりではなく、どんどん挑戦していきたい」(香山教頭)という精神がそれぞれの教員に根づいている同校は、今年度も新しい動きを生んでいきそうだ。